

地に帰ったが、あの時にはいつてきた現役兵はほとんど戦死している。

第三回目の召集は二十年一月羅南陸軍病院要員として東部第二三部隊菅原隊に編入され仙台出発、博多、釜山をへて羅南に行き、六月に衛生兵長になったと思つたら、すぐに独立山砲兵第二十連隊に転属です。

咸鏡北道鏡城というところで隊付衛生兵として勤務しました。山砲連隊といつても当時の装備は貧弱で、山砲は訓練用の旧式のもので、とても戦いにはならないシロモノでした。

七月南方行きかわかりませんが濟州島に移動となり、麗水港から乗船すべく七月十六日麗水に着き海岸に出ると、現地の人が大勢で米俵や味噌樽や衣服を、さかんに乾かしているので聞くと、昨日出港した輸送船が港を出てすぐ米潜水艦にやられ、その漂着した物を始末しているとのことでした。明日はわが身かと気味悪く思いました。

七月二十二日乗船した時は天に無事を祈りました。その日のうちに濟州島に上陸、やれやれでした。南方へ行

けなくなつたのかわかりませんが終戦を濟州島で知り、十一月八日復員のため出港、十日九州佐世保着、翌十一日召集解除となり、これが私の軍歴の終了です。

なお九月一日で陸軍衛生伍長に任官と記されています。

## 北朝鮮会寧歩兵砲隊

現役三か年

新潟県 渡辺 孝三郎

—現役で入営したそうですが、どこへ行ったのですか。

私は大正八年十一月生まれで、十四年の徴集兵です。十四年十二月現役で入隊ですが、大阪へ集合し、区役所で軍服に着がえ、それを自宅へ送りかえし、翌日、大阪城を見物(軍服を着て)したが、平時だから出来たのでしよう。

「私も三年勤めればいいのだ」と思った。大阪港で貨物

船(馬を積んだ船)で、物すごくくさかった。くさいのと船酔いで皆半病人。私は比較的よかったので、皆の世話をした。約一週間で北朝鮮の清津港へ着きました。そのときは寒いのにたまげた。水道の栓の下が氷ついてたままっていた。「朝鮮とはこんなところか」と思った。清津へは十二月の二十八日、九日かな、とにかく十二月末だった。

—入営して、とくに内地をはなれての朝鮮の連隊ですが、いままでの生活との差はどう感じましたか。

入営したとき、軍隊とは、なんといいいか言葉に言いつくせないところだと思った。「古参兵、戦友の面倒をみるように」と言われた。一班に二十二人、真中にオンドルがある部屋だった。片側に十一人か、そのなかに、神様などという一等兵(二、三人しかいないが)がいて、班長の言うことも聞かぬ、いわゆる万年一等兵で、進級されない、その人たちが一番恐かった。

班には、初年係、班長がいたが、班全体のことを考えていたようだったし、理解もあった。私は軍曹の当番をやった。一期の検閲を終わって、精勤章二本(山形三つ)

をもらい一選抜の上等兵になった。

—早く上等兵になるとねたまれて、二、三年兵の一等兵との関係はどうでした。

意地悪い人もいたが、味方になってくれる人もいた。私はガス兵の教育を受けたが、教育はきつかった。人間が、ガスでいのちを取られるとは、恐ろしいことだと思つた。ガス室に入れられるとこわかった。そのなかで、苦しい訓練を受ける。糜爛(びらん)性・窒息性などがあり、その訓練を毎日受けた。

防毒面、防毒衣を着ける訓練、消毒剤散布の要領、風向、風速等もこまかく想定して教育を受ける。飛行機からガス散布想定のものとの訓練もさせられた。毎日、明け暮れガス兵としての任務を遂行した。

—本分がガス兵ですか、それともなにか本業教育を受けましたか。

私は重機関銃だったが、九二式の大隊砲がきたので、砲の運搬は駄載だったから馬部隊だが、馬については素人、生まれてはじめてあづけられたが、非常につらかった。

馬当番は一晩だが、厩舎廻番は一週間、放馬とかなんとか、馴れるのに大変だった。

私は馬をこわいと思っているので、馬は蹴る、噛む、抱くで、相手の人間を見分けする。馴れた人にはおとなしいが、初年兵は馬鹿にされている。紐をつかんでも跳ねたり動かなかったり。苦しみながら、いやいやながらも馬は賢い動物だと思ったり。

—大隊砲は馬にどういうふうに積むのですか、また訓練のようすはどうでしたか。

車輪は両脇、脚、砲身、よう架と四頭積みにする。弾薬は弾薬箱に四発あて入れ、両脇に積む。だから一頭は八発というわけです。実戦はなかったが演習はつらかった。耐寒訓練は会寧から国境を越えて満州の方までいった。一週間ぐらいで、それが終ると師団演習、酷寒の時をみはからってやる。それを毎年だから三年間やったこととなる。一年目は重機関銃、二年目以降は大隊砲でした。

昭和十七年の四、五月頃か、召集兵がどんどんとはいつてきた。それで、我々現役兵は甲部隊と呼ばれ、召

集組が乙部隊となった。甲部隊はいままでの兵舎、乙は三城山演習地の兵舎にはいった。甲と乙は一月交替といわれていたが、私にはなかった。兵員が一杯になったので、二段ベットにしていた。甲乙の日常の作業はおのずと違う。

私は三年で満期除隊になるわけだが、新しい兵器や被服が渡され、いよいよ戦争に行くのかと覚悟した。

認識票（真鍮製のお守り札のようなもので、そこに記号や番号が刻印してあり、戦場で死んでも個人個人が識別される）を肌につけた。いつ命令が出てもいいように。

召集兵がどんどんくるので、我々が出るのだ、甲（現役兵）は第一線、あとに残るのは乙（召集兵）とおもったし、またそういわれていた。ところが、十七年の十二月三十日付けだったが、突然昭和十四年兵は「除隊」と命令がでた。

私は喜んでしまつて「帰れる」と汽車に乗り釜山まで行ったが、その間飛行機が護衛してくれた。さらに船で下関まで行ったがこれも飛行機が護衛してくれた。下関

で現地解散した（兵器は持たず軍服だけ着ていた）。

被服は一週間以内に原隊へ返納せよとのことで、下着、服、巻脚絆、帽子や階級章まで、会寧まで小包で送る。内地へ帰るのになにも買えなかった。とくに衣料品は駄目だった（統制で）。

その後、十八年新潟市柳島の軍需工場に勤務し、それから青年学校の指導員となって、歩兵操典に基づいて、終戦まで軍事教練をした。教官が少尉で、軍曹が助教、私が助手となった。そのうち、学徒動員があつて、男も女も学生にも教育した。物すごく多勢でした。

その間、一週間に一度、新潟の連隊区司令部へ出向して、召集延期願を出していた。

終戦近くになると、空襲が盛んになり、避難訓練などの教育をした。新潟市はB 29の爆音はするが空襲はなかった、長岡や水原の方には爆弾が落ちた。

結局は戦争が終るまで、幸か不幸か召集がなかったわけです。これも運命だったかも知れません。我々の同年兵はほとんど再召集され、戦地へ行って死んだ者も多かった。